

二次元ぷち文庫

蒼き聖騎士

リテア

異伝

或る娼婦の日常

空蝉

表紙イラスト: けいじえい

試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『蒼き聖騎士リデア異伝 或る娼婦の日常』
に基づいて作成しております。

※本作は二次元ドリームノベルズ『蒼き聖騎士リデア』（キルタイムコミュニケーション・刊）とともにお読みいただけますと、よりお楽しみいただけます。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



蒼き聖騎士

リテア

異伝

或る娼婦の日常

空蝉

表紙 / けいじえい

登場人物紹介

Characters

リデア

かつてラルス王子を護衛する旅を続けていた、聖騎士。

ラルス

かつてラトゥール国の王子だったが、奸臣の陰謀により放逐されてしまう。

冷たい夜風が吹きすさぶ寒村。夜の闇を照らす街灯すらないあぜ道を、薄着一枚を羽織り、女は歩いてきた。背中を彩るブラウンカラーのロングヘア。薄桃のベビードールは奥の素肌を余すところなく透かせて晒し、発育した見事なプロポーションを闇夜の陰影に浮かばせる。生脚も露わにサンダルの音を響かせ、かつては女騎士だった娘——リデアは想いを闇夜に忍ばせた。

肌寒くはない。つい半時前まで睦みあつた夫、ラルスの肌の温もりが余韻としてまだ残り、胸奥で情欲の火を燻らせてくれている。胎奥にはしつかりといつも通りラルスの精が染み渡り、今もたぶたぶと膈内で波打っていた。夫の劣情を溜め込んだ股下から引火した火照りを浴びた胸が歩に合わせて揺れ、夜風に長い髪がたなびく。

冷たい風が、微熱を帯びた肌を徐々に、心地よさを伴って冷ましていった。

「今日は何人かな。……早く帰れるといいけれど」

今日の客は何人待っているのだろう。今宵の仕事に想いを馳せるだけで、薄布の下で剥き出した生殖器がヒクヒクと蠢く。その奥には、先ほど夫に放たれた子種がまだたゆたっているというのに。

考えながら所定の場所へ、村の外れにあるあばら家へと向かう。じゃりじゃりと砂利を踏みしだきながら愁いを帯びた貌を上げれば、もう視線の先にぼろぼろの屋根が見えてきた。雨漏りの酷い穴空きの屋根に、形ばかりのベッドが設えられた、すえた匂いの溜まる

一室。そこが、今の仕事場だった。

『……今日も、行くの？』

そう背中に語りかけた夫の、無言の引き留めを思い出す。客が少なければ早く帰って、家で待つ幼い夫と添い寝できるかもしれない。だがそれは、少ない稼ぎのせいで明日の食事さえままならぬ事態をも伴う、許されざる誘惑に違いない。いじましく絡む視線を振り切るように、今夜もリデアは家を出てきた。

夫である亡国の王子、ラルスは稼ぐすべさえ知らぬ、リデアが見放せば死んでしまいかねないほどに小さく弱々しい存在なのだ。

（だから——私が働かないと。それは、ラルスを守りきれなかった私の、罰）

村の男衆に夜な夜な肌を捧げ、彼らの精を搾る一夜妻となる。生まれてから二十歳を超えるまで、剣に全てを賭け、主君に剣を捧げてきた。その主君を守るため陵辱にまみれ果てに剣士としての道を絶たれた女が行き着いたのは、娼婦。恥辱と調教の蜜に溺れた艶かしい身体を持って余すリデアに残された、唯一夫婦で生き残る手段だった。

（言い訳が欲しい、だけなのかもしれない。……肉欲を満たす、理由が）

ギィ——。自嘲の薄笑みを差し浮かべ、娼婦は今夜も軋む戸を押し開く。

「お、やっときたか。へへ、今夜はまだ俺たちだけだぜ、リデアよお」

ぼろ小屋に居たのは、二人の男。名を、確かゴモスとゴランという、村では大工として

生計を立てている親子だ。禿頭でがっしりした体型の父親、ゴモス。しばらく洗っていないベッドの布団に尊大に腰掛ける彼の隣で、隠れるようにおずおずと視線を送ってくるのが息子のゴランだった。粗野な父とは正反対に、彼は口数も少なくひよろりと瘦軀だ。二人とも質素な半袖のシャツに作業用のズボンを穿き、ギラギラと照り輝く目つきで、たった一人の娼婦を早速犯しにかかる。

（あ……男たちの視線。私を欲望の処理道具として見る、下品な目つ……ああ……）
蔑みと羨望と情欲の複雑に入り混じる牡の視線に晒され、薄布の奥の肌がチリチリと火傷したように熱を帯びていく。

ただ肉欲の処理道具として扱われることへの被虐悦楽が、幼い夫に抱かれる時とは決定的に違う昂りをリディアの熟れた肉体にもたらず。見られただけで乳首は尖り、スケスケの布地をツンと押し上げては切ない疼きを胸肉全体に波及させていく。

「リ、リディア、さんっ……」

どこか媚びたところのある卑屈な彼の態度が、リディアはあまり好きではなかった。だが客は客。この場では、リディアは彼とその父親、二人の一夜限りの妻となる。

「ゴランさん……緊張しないで。いつものように、ね？」

今の職についてからほどなく身につけた柔らかな、媚びの混じる微笑を差し出せば、それだけで瘦せた男は天にも上りかねない調子で舞い上がる。

「んじや早速頼むわ。またたつぷりザーメン溜め込んできたからよオ」

——ぶるんッ！ おもむろに膝下までずり下げられた粗末なズボンの継ぎ目から、雄々しく反り返る肉欲の塊が姿を見せる。ドクドクと脈を重ねる幹に青筋を浮かせ、先端の赤黒く腫れ上がった割れ目から透明の糸引く雫を垂れ零す、牡の象徴。

（く、ううん……この匂いが、私をダメにするのおっ……）

目が眩むような喜びが胸奥で弾ける。娼婦と客に、馴れあいも、甘い言葉も不要だった。ただ差し出されたペニスから香る生臭く蒸れた刺激臭に小鼻を震わせ、感じ入る。肺一杯に吸い込んだ欲情の徴に、熟した肉を乗せた尻たぶが自然とぶるりと震えた。

「……いつもの、お乳でシコシコするやつ、ね？」

「おお、そうさ。おめえのデカくてムチムチの乳で、パイズリだあ」

ベッドに落ち着けた腰をクイと突き出し、これ見よがしに勃起ペニスを見せつけられる。思わず生唾を呑むほどにたくましく反った、極太の肉棒。夫であるラルスのものより二回りも三回りも太く、硬く尖った龟头が牝肉を求めヒクついている——。

もじつく尻をしゃがませ、男の前に跪く。ゴモスが無精ひげを擦りながらニヤついているのは、豊穣に実った乳肉の谷間が丸見えなせいだ。男の視線を自覚し、わざと見せびらかすように女の徴を揺さぶり、脇を締めて谷間を深く形作って、差し出す。

はらり——肩ヒモが曲線を描く肩から娼婦自身の手が滑るのに合わせ落ちていく。両手

を胸の下で交差させ、わざとベビードールが垂れ落ちぬよう押さえ込む。上半分だけ現れた、媚肉のみっちり詰まった半月の如き乳谷に男二人は目を奪われ盛り狂った。

「へへ。村の女とはやっぱ熟れ具合が違うなッ……！」

ねっとり粘っこい視線が二つ、左右の乳たぶを溶かしそうなほどに絡みついてくる。早まる鼓動と、火照る頬。ほんのりと羞恥と高揚の桜色を帯びた乳肉をさらにきゅっと脇を締め持ち上げて。娼婦は今宵の夫にニコリと淫靡な笑みを捧げてみせた。

「今宵、リデアは貴方の一夜妻……乳も、尻も……オマ○コも、ぜんぶ貴方に捧げます」
すでに言い慣れた、娼婦としての挨拶。抑揚を聞かせ媚びに媚びた上目遣いの視線と重ねて蕩けた声を吹きかける。男どものほうは、何度目であろうと「美しい牝を従属させる」
暗い悦びに欲情をたぎらせてくれた。

「はっ、ははッ！ たまらねえッ！ おいゴラン。お前も採め！」

——ぎゅッ！ぎゅぎゅううッ！

差し出された掌に余る乳肉を衣装ごと逆手で揉みしだき、男が下卑た哄笑を轟かせる。ごつい掌からむにゆりとはみ出た乳房がズクズクと膿んだようにもどかしい疼きを掻き立てた。もつと。強く、乱暴に扱って欲しい。彼らとは商売上の関係なのだ、どこかで踏みとどまらせることを願っているのかもしれないなかった。

「と、父ちゃん。あまり強くしたらかわいそうだ……」

「ああん。何言ってやがる？　これがコイツの商売じゃねえか！」

——ぎゅぎゅむっ！　ぎゅうう〜！

思いきり捻り上げられた右乳房が無様にひしゃげ、衣装から零れ出た。たちまち乳肌を這う鋭い刺激に應じて、甘く切ない痺れが噴出する。

「あくううう！　はっ、はうア……！！　いいっ、力づくで犯されるのが、いいのおっ！」

ゴランの氣遣いは、かえってリデアを苛立たせる。そうした氣遣いを自分にくれるのは、愛しいラルスだけで構わないのだ。ただ肌を重ねるだけの一夜の夫たちに求めるのは、強引な、腕力任せの陵辱。かつて王都で味わった「性処理便器」としての三年が、いまだに娼婦の股と胸には鮮烈に焼きついている。

「おら、リデアもこう言ってるしよ。つつ立ってねえでおめえも味わってやれや！」

「わわわかった。じゃありデアさん、あの……キス……」

キス。愛を確認するための行為を要求して、若い男はしゃがんだりデアの背中に覆い被さるように抱きついてきた。髪をなびかせ顔だけで振り向けば、すぐ目の前におちよぽ口で突き出された唇がある。わずかな逡巡と、言い知れぬ背徳の悦びに身を任せて。娼婦は甘い唇を若い牡に分け与えた。

「んん、ちゅ……ちゅる、ちゅッ、ちゅぶあ……お口、おいひい……？」

軽く上唇と下唇とを交互についばんだ後、おもむろにたつぷりと唾液の乗った舌を差し

入れる。昂奮した男の口内はドロドロに火照って粘つき、たちまちのうちに侵入者に吸いついてきた。

「んぷ、ぷうあ！ リデアさんの舌ア……ぢゆる！ お、おれえ、きふひて、ぢゆるる！」
 目の前の男と口付けを交わすのは初めてではない。ゴランはリデアを「買う」たびに、キスを要求してくる。明け透けな好意を人妻である娼婦に押しつける、ある意味最も厄介な客の一人だった。

（んああ、はげしい、すごい吸いつき……）

それでも舌先を擦る彼の熱心な舌愛撫に腰が痺れ、感電したかのように床の上でカクカクと揺れる。喜悦に頬染まり、潤んだ瞳が熱っぽく息を吐く男のそれと絡む。火照った息が重なる口中で渦巻くと同時に、ゴランのとろみを帯びた唾液が舌を伝い流れ込んできた。
 「んぢゅづッ！ ぢゅりゅう……よだれっ、のませふええっ……はふちゅうう！」

ゴクツ、ゴクツ……。進んで差し出した舌が男の舌と絡み、吸い取るように唾液を奪い吸り飲んでいく。喉元を流れ落ちる粘性の汚濁に、カツと胃が熱を纏い痙攣する。絶え間ない肉悦がもじつく股下で発生し、トロトロと剥き出しの蜜壺から蜜を漏れさせた。

「へへ、キスだけで感じるドスケベなアマが。売女はおめえにお似合いの仕事だアッ！」

——ぎゅちツ！ ぎゅちちイイッ！

息子と商売女のキスを楽しんで眺めていた男が突然、思い出したように掌に収めていた

乳房の尖端を——ぼつちりと突き出た桜色の突起を摘んで、目一杯捻り上げる。瞬間、リデアの目の前が白く弾けた。

「あぎィ……いひああ！ お、おっぱいちぎれるううう！ いた、痛いのオオオッ！」

「痛いのがいんだろオがよ！」

——ぎゅむッ！ ぐりゅりゅうッ！

反射的にゴランの口腔から離れた唇が、痛苦の叫びを上げる。だがその中に甘い色が混じっているのを、ほぼ毎日通ってくる親子が見逃すはずもなかった。

「んんぶッ!? はぶ、ちゅりゅる……いひゃい、けどィィ……ろおッ、んぢゅ……！」

顎を掴まれ、再度振り向かされた唇が熱っぽい口腔に押し込まれる。待ちわびていた牝の舌に大量の唾液を運ばれて、溢れ返る汚濁で浸された口内粘膜がピクピク震えた。痛みも屈辱も、全てを肉欲に転化できるよう躡けられた肉体が、わずかに踏みとどまろうとする心を押し流し、悦楽の渦へといぎなう。

（舌あつ……ネトネトがいいのお！ 胸もじんじんして痺れるっ……）

表面積全体でへばりついてくるゴランの舌を、それよりも一回り小さい己の舌で受け止める。捻られるたび健気に膨らみ、指腹を押し返す乳首は左右ともぶつくりと充血し硬さを増していた。ゴランの舌も、ゴモスの掌も。どちらもが牝の欲望を具現化した淫熱を帯びて、牝肉を貪り果てのない肉悦の底へと引きずり込んでいく。

「はぷっ……、うああん！もつとつ、もつと強くしてもいい、のお……！」

ぎゅうぎゅうと搾られる右乳房が、まず透けるピンクの娼婦衣装から完全にまろび出た。薄桃の衣装から零れてもなお、火照りと欲情の熱でうっすらと薄桃色に染まる乳肌。男の指を吸いつけ離さぬきめ細かさはそのままに、長年の娼婦生活で弄られ続け、随分と大きくなつた親指大の乳首がピクンピクンと切なく悶え狂う。もつと狂おしいまでに喘ぎたい。乱暴な陵辱を与えて欲しい。そう、咽び泣いてせがむように。

「へへ、お望み通り。おら……よつとオ！」

——ぎゅうぎゅうぎゅうッ！ぎちッ！ぐぎゅうぎゅうッ！

硬く、けれど弾性のある両の乳首をねじ切らんばかりに捻られ、捏ねくられる。痺れるように乳奥にまで流れ込むのは、痛みでなく、肉の悦び。ズクズクと疼きマグマのように溜まり込んでいた濃厚な欲情の塊が、乳腺からドブドブと噴き上がる。

「はおっ、おくうう！ イッ、んっ……ぶちゅうう！」

今度は、たまたまず自分からゴランの唇に吸いついた。舌で彼の唇をついばみ、歯の表面を舐め上げて服従の意図を示す。すぐさま飛びついてきた牡舌をねつとりと唾液で湿らせた舌で迎えながら、さらに背中に張りつく男の股間を熟れた尻肉で撫で擦る。

「んぶ!? ひっ……すげえ、やつぱエロいよお……リデアさん、リデアさんッ！」

剥がれた唇を追いたて、ぬめる舌で疎ましく名を呼ぶ男の唇を抜く。唇で唇を塞ぎ、逃

艶熟の娼婦は、悲哀と鬱屈した被虐の淫悦に身を嬲られ。

中年の牡は、未練がましく白濁を見る牝を見下ろして冷笑を浮かべていた。そして、年若いもう一匹の牡は、

「……あの糞ガキの種なんかで孕ませてたまるか。あんたを、リデアを孕ませるのは……この俺だッ!!」

ずぶぢゅぢゅッ!

「んんはアアア! い、いきなり、奥までええ!」

嫉妬を帯びてこれまで以上に膨張した肉勃起が、荒々しく子宮を叩く。脅かされる孕み穴は締めなくなりパクパクと、新鮮な牡汁を欲して口を開き牡を招き入れようとする。同調して蠕動した膣壁に掃き出されるように、蜜で薄まったラルスの子種は膣外へと排出されていった。

「搔き出してやる。一滴残らず搔き出して、俺の種だけであんたのマ○コを一杯にしてやるんだッ!」

ずぶッ! ぐぼぶ! ごぼんッ! ぐぼびゆるっ……。

「ダメッ、出ないでッ、私の中から出ていかないでええええ——!」

恥辱にも、背徳にも耐えた心が、初めて心底の悲鳴を上げていた。ラルスが注いでくれた温もりが、彼が刻んだ契りの徴が逃げていってしまう。彼の皮被りペニスよりもずっと



たくましいカリ高の肉傘が、繁殖力で劣る牡を排斥するように繰り返し膣道を往復し、脈打つ幹で自分以外の牡の痕跡を綺麗さっぱりと掃除し尽くしていく。

「はは、こりゃあいい！ 腹ボテ売女を抱くつてのも、っひひ、たしかに愉しそうだあな。さすが俺の息子だぜッ！」

醜い独占欲に突き動かされる息子の意図とは別のところで、ゴモスもまた孕んだ牝娼婦の姿を夢想し暗い悦びに囚われていった。

（嫌……ラルス以外の男の子を身籠るなんてっ、絶対にイヤアアアアアアアア！）

嫌な音を立て軋む心が、警鐘をひっきりなしに鳴らしている。本能が告げる、望まぬ牡との受精への怯え。だが熟した牝の肉体は今まさに熟れきった卵子を備えて口を拡げ、新鮮で優れた牡の精子を求めて、強烈に膣内全体をうねり狂わせていく。

「うぐッ……ははっ。そんなに俺の種が欲しいんだ。やっぱり俺のほうがリアさんとっ！」

猛る龟头を捕まえた膣壁が、自ら牡を奥底へと招き入れ、子宮の入り口へと案内する。ぴっちり張りつかせた粘膜はたつぷりの蜜を幹にまぶして歓待し、きゅきゅつとりズミカルな締めつけで射精をねだった。

「そおら。ケツも忘れちゃ困る……ぜツとオ！」

——ぐぼンッ！ ぼぢゅー！ ぢゅぼぶン！ ぶっぼぶぼぶッ！ ぢゅぶぐぶりゅりゅッ！

「はぎイッ、やあああ！ スライムっ、お腹の中でグチュグチュゅってるッ、ひっ、ひあ！ お尻イッ、馬鹿になっちゃってるろオオオッ！」

絶え間なく我が物顔で尻穴の中を侵攻する極太の幹に、スライムは小さくコマ切れになりながら腸内の隅々に染み渡り、粘膜へと付着する。冷たい魔生物のボディが愛蜜と混ざり生ぬるく溶けゆく明らかなる異物感。下腹がそれらに拒絶反応を示し、ぎゅるぎゅるとけたたましい音を鈍痛とともに奏でても。

「ふんっ、ふんッ！」

「ぼぶ！ ぼぼぢゅ！ ずぶっ、ぶっ、ぐぶぶぶうッ！」

牡の激しい突き込みに蕩けただらしない尻穴は、入り口の小ジワを目一杯に拡げ、テかる腸液で化粧を施し、熟れた身にも余る淫らな情欲を全身に解き放っていく。快楽に慣れた心はグズグズに溶かされ従属を余儀なくされていった。

「はひッ、はひいっ！ おひりもっ、オマ○コもッ、奥までいっぱい！ いっぱいらよ
おとおおお！」

溜まる唾液に浸り、肉欲の痺れでろれつの妖しくなった舌が淫らな喘ぎを止め処なく吐き出し続ける。

「はあっ、はあー……もうじきだ、出すぞ。奥で。一番奥で種を植えつけてあげるよッリ
デアあああ！」

びゆるつ、びゅつ……。

結合した淫部から漏れる汁は、いつしか白濁色ではなく、泡立った半透明の汁に変わっていた。幼い夫の子種は全て掻き出され、今は娼婦妻と夫ではない牡の我慢汁が入り混じる、不貞の徴たる汚汁が漏れ出ている。

（ラルス、ごめん、なさい……こんな時でも気持ちよくなっちゃう、淫らな私を許してえええええ！）

夫ではない牡に種をつけられる。その許されざる誘惑に、散々突かれて解された肉の花びらは抗うことができないうた。許して欲しい。そう願う心の隅で、逆に許さないで欲しいとも思う。かつて純粹に剣での立身を志した娘時代を知る、彼にだけは――。

ビクツ、ビクビクウツ！

「ふあッ、また硬くうっ、子宮が鳴いてるっ、突かれて鳴いてえっ！ ひゃっ、あひんっ、ひいあアア――！」

脈動する二本の肉棒が薄壁越しに擦れあう。同調して女の泣き所――最大の弱点である子宮がキュンキュンと切なく呻く。子を孕む器官が完全に墮とされてしまった。いつの間にか、若い牡に抱きつき、腰に両脚でしがみついて、ぴったりと股間同士をすり合わせる。孕みたがっている。より強い牡に種つけられることを夢見て、熟しきった肉体が啼いている――。己の身体に裏切られた心はズタズタに、その鋭い痛みさえも開発された肉体に

奔る快感によつて被虐の悦びへとすり返られ。

「お、っ……イク、もう出るぞっ売女アア！」

「はあっ、はっ……一番奥でっ。出してやるっ。絶対に俺の子を産ませてやるうっ！」

ブクリと一際膨らんだ肉の楔が深々と牝穴を抉り、腸の壁を打ち叩く。どすんと腰を落とした親子の肉棒に串刺しにされ、娼婦の淫らな穴二つがキュンキュンと嬉し泣きをしいては甘い蜜と、青くとろみがかつたスライムの残骸を吐き零した。

（はう、スライムがまるでウンチみたいに出てくるうっ……えっ、あぐうう!!）

てつきり、せつかく与えられたスライムが腹の中でぐちゃぐちゃに混ざり、死んでしまったものだと思つていた。だが人の手によつて造り出されし魔生物は、強靱な生命力を發揮し、コマ切れにされてもなお腸内でビチビチと跳ね回る。それどころかセリー状の肉片を再結合させようと、寄り集まり、接着剤代わりとばかりに腸内の汁気を根こそぎ吸いたてる。

——ぐりゅうッ！

「あぎッ……引つ張られてッ、るううう！ お腹の中ぢゅぢゅうって吸われてッ！ スライム吸いついて離れないのオオオッ！」

吸引され引つ張られた腸内粘膜が、絞り出されるように腸汁を染み出させながらきつく、きつく牡肉とスライムを締め上げた。みっちり詰まった腸内で、種の異なる牡が領地を争

うように突きあい、摩擦熱を放ち、互いにマーキングのための汁を過敏な粘膜に塗り込める。「ぐぬお！　ね、ねちやねちやしたのがちんぽの先に絡んでッ、くそオオオッ、もう持たねえッ……出すぞお、いいなッ、いいなッ!？」

固まりかけたスライムを掻き解すように突き込みを続けて、中年男が咆哮を轟かせた。パンパンと背中にもぶち当たる中年腹の柔らかさに不思議な安心を覚えて、たわみひしゃげるたつぷりの尻肉の中心で灼熱のマグマがせり上がるのを感じ取る。込み上げる本能的な喜悦に突き動かされ、無意識にリデアは尻を背後の黒い茂みの中心へと打ち下ろした。

「逃がさないっ……俺だつてあんたの奥で、マ○コの中でたつぷり種付けすんだッ、おあッ、あッ、あぁッ……ッ……!」

じゅッ……ぱちゅんッ!!

後ろに逃げる淫門を追いかけて突き刺さる肉勃起が、丸みを帯びた傘状の突起で墮ちた子宮を強かに叩く。男の手が握り締めたベビードールの裾が、牝の劣情を哀れむように衣擦れの音を響かせた。

揺らされ、たつぷりと亀頭に寄せられた先走りとも漏れた精ともつかぬ粘液を塗り込められ、痺れるような愉悅の中で。ついに子宮は頑なな唇をゆつくりと、淫らな汁の糸を引きながら抜げていった。

(今出されたら、絶対に妊娠するっ、は、孕んじやううううう!)

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>